

テカンタ型遠心脱水機でトップシェアを誇り、総合遠心分離機メーカーとして国内外、民需官需ともに幅広い実績を残す巴工業。塩野さんは、リーマンショック直後の今年1月に社長に就いた。あれから9ヶ月、まだ落ち着かないと言いつつも、

忙中閑話

「背伸びをしてもしょうがない。身の丈にあったスタイルで淡々とこなし会社に貢献していく」とあ

くまで自然体。

入社以来、環境関連畑でキャリアを重ねた塩野さん。快活、飾らない人柄で、下水道界に幅広い人脈を構築。常に第一線から新規市場開発に携わってきた。雨水吐き室に設置するろ過スクリーンは台流改善向けに百数十

台納入しヒット商品に育つて、汚泥炭化装置も国内に実例がない時代から手掛け高温炭化・高力ロリーのシステムを実現した。

そんな百戦錬磨の塩野さんでも、世界的な景気減速と数年來続く国内官需の落ち込みで苦戦必至

O₂換算で40%減、消費電力50%減を達成した遠心脱水機をすでに開発済み。トレンドの金属ろ過材系もロータリープレスを保有し中小都市で需要

が増加中。「従来型公共事業でも更新需要で出番は多い」と確信、コアビジネスとして注力する。



巴工業社長

塩野 昇 氏
しおのぼる

生き残る技術を志向

か。「下水道は無くなら

ない。メーカの特徴を活かし、時代に淘汰されず残る技術を志向し勝ち抜く」と腹を据えており視界も良好。

海外市場ではアジア、北米が主戦場。新興著しい中国市場向けには「戦略機種、低コスト遠心脱水機」を独自開発した。3年前に立ち上げた現地工場で生産する計画。すでに北京、重慶、西安の処理場で同社脱水機が稼動するなど足がかりもある。「欧州一流メーカーと

国際競争」を強いられそうだが、戦略機種投入により来年度以降、「中国市場を軌道に乗せる」と自信に満ちる。思い入れある炭化装置も中国、韓国で始動。

「民需では広がりが見える」。世界的に潜在需要が見込める太陽光発電向け装置は成長分野と期待。分離機部門と双壁をなす化学品部門は苦戦中だが、厳しい状況だからこそ、敢えて嬉々として果敢に、かつ確信を持って挑む。余暇のジャズ鑑賞と、家庭菜園(事情があり休養中?)でリフレッシュしながら。

〈略歴〉

昭和25年9月7日生まれ長野県出身。昭和48年中央大学理工学部卒、同年入社。平成9年機械本部環境設備営業部長、同年取締役機械本部長、17年取締役機械本部長、21年現職に。